

ケアプランに生活支援の助け合い活動及び本人のいきがい活動をどう取り入れるか

提 言

主役は本人、地域は主役の伴走者。
ケアプランは両者のつなぎ、
本人の「したい」を実現する為に、
地域を含めた多くの力を結集しよう！

登壇者

【進行役】	江田 佳子氏	佐々町住民福祉課地域包括支援センター課長補佐
	熊谷 美和子氏	(特非) たすけあい平田理事長
	瀬戸 健太氏	寝屋川市高齢介護室
	水上 直彦氏	(一社) 日本介護支援専門員協会介護保険制度・報酬委員会委員長
	安本 勝博氏	津山市健康増進課(兼) 高齢介護課
	川部 勝一氏	厚生労働省老健局認知症施策・地域介護推進課課長補佐

■ 寄せられた声から

- ケアプランとインフォーマルサービスの必要性をより多くの方に伝えていく仕組みづくり、環境づくりが大切だと感じました。
- 本人の「したい」の奥深さが印象的でした。皆で支えるためには、国、行政、包括、生活支援コーディネーター、各事業所なども自分だけの分野に留まらず連携が必要だと感じました。
- 熊谷さんの発言で「助け合いの会を作っても、永く機能する組織にしていかなければ意味がない」という言葉は、SCとして約2年前に立ち上げた助け合いの会に関わっている者として胸に刻みたい言葉でした。

議事要旨 江田 佳子氏

前回の大阪サミットでは、「制度の中に住んでいる人ではない。地域の中に住んでいる人。地域での暮らしに視点を置き、地域の社会資源に目を向け、生活の立て直しを組み立てていくケアプランを作ろう。その仕組みづくりも当事者・住民と共に！」と提言した。

今回はもう一歩掘り下げ、その中心となる「本人のいきがい」とは何かに注目し、ケアプランの展開について、議論を進めた。今回の提言にたどり着いた内容は以下のとおりとなる。

●本人の「したいこと」がケアプランの中心に

要支援の方で健康だと感じている方は「自分のしたいこと」を思い通りできて、それに満足している方が多いという研究データの報告があった。本人自身が望む「本人のしたいこと＝いきがい」を実現していくプロセス支援はとても大切であり、それを計画的に動かすツールとして期待できるものがケアプランである。

●ケアマネージャーはケアプランを動かす為の

「つなぎ役」であることを意識しよう

「したいこと」の奥深さ、それを引き出すこと、それを関係者と共有し、実現していくことの難しさを皆で共有し、それはとてもケアマネージャー一人でできることではないことに気づかされた。ケアマネージャーはケアプランの作り手ではなく、ケアプランを動かす為の「つなぎ役」であることを意識し、一人で抱え込まず多くの応援者と繋がりながら活動してもらいたい。また、それを大きくサポートする為に、地域ケア会議が重要な役割で

あり、愛を持って展開していこう。

●「したい」を実現する為に

地域を含めた多くの力を結集しよう

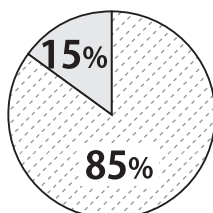
「本人のしたいこと」はこれまでの生活や地域の関係性の中にある。それを実現する為には、本人をよく知り、地域を含めた多くの力を巻き込むことが大切。本人を取り巻く関係者が本人の思いを受け止め、できることを応援していく。手伝ってほしい人がいるから、活躍できる人がいる。皆が声を出し合い求め合えば、地域は活性化し温かいものとなっていこう。「本音が言える、その人をよく知る人がいる、応援する人がいる」地域づくりを、一人ひとりを大切にしながら展開していこう。

最後に、川部さんから国としても現場と同じ思いであり「地域で支えること、インフォーマルサービスを進めていきたい」との意見に、全国の4万事業所や20万人のケアマネージャー、地域全体に上記のことをどう伝えていくか、意見を出し合った。

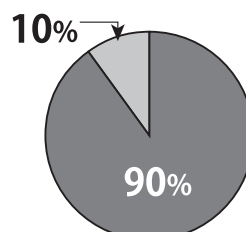
安本さんからは「現場の経験から得たものを熱意を持って伝えていこう」、熊谷さんからは「無いサービスはみんなで作っていこう」、瀬戸さんからは「現場が動きやすい仕組みづくりをしていこう」、水上さんからは「日本介護支援専門員協会において、国の制度をわかりやすく解説し実践に向けて取り組んでいきたい」との心強いメッセージをいただいた。本提言の実現に向けて、各方面から力を合わせて取り組んでいきたいと思う。

アンケートの結果 参加者概数：130名（オンライン：126名、会場：4名） 回答者数：34名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方

